

2025年3月13日

T. Kobayashi

民俗学者柳田国男はこんな人だった

各地を旅し、各地の山を歩いたことから、各地の様々な伝承や文化などにも興味を持つ結果となった。地名や民話・伝承などについて触れた資料を調べると、背景に柳田国男が存在することが多かった。コロナに襲われて遠方に旅をすることがなくなり、その代りに千葉市周辺の歴史散歩に時間を割くようになった。我が家の周辺は、明治時代から昭和20年の終戦まで陸軍の演習場だったので、歩いて見れば様々な形で軍国日本の歴史に出遭うことになる。

2022年から2024年にかけて、「我が国が軍国になった経緯」を遡って見たくなり、断続的に様々な書物を読みあさったり、自分の目で見歩いたりをした。

そんなことをきっかけにして読んだある書籍の中に、民俗学者になる前の柳田国男を発見した。民俗学からは遠く離れた分野の書籍なので、意外性に驚いたと同時に興味も感じた。

日本の民族学者としては歴史に名を残す何人かに数えられている「柳田国男（やなぎたくにお）」の生涯に興味を持ち、調べて見ることにした。

●Wikipedia に載っていた柳田国男

柳田国男は、1875年（明治8年）に兵庫県（現在の神崎郡福崎町）で生まれた。姫路から播但線で17Kmほど北上した、溜池が点在する低山に囲まれた盆地で、[生家](#)は文化財として残されている。

父親は姫路藩の儒学者で、男ばかりの8人兄弟の六男だった。

11才の時に地元の旧家に預けられたことから、この家にあった膨大な蔵書を読破した。

12才の時に、医者を開業していた長男に引き取られて、茨城県の布川（現在の北相馬郡利根町）に住むことになった。利根川北岸の農村で見た景色は、故郷兵庫県の山間の農村で見たものとは異なり、貧困にあえぐ農民の姿だった。ここでも隣家の蔵書を数多く読む機会があった。

16才で上京し、兄（三男）と同居して図書館に通い読書を継続。ここで、医学を学んでいた兄の紹介で森鷗外との接点ができた。

17才の時に、尋常中学共立学校（のちの開成高校）に編入学。翌年、郁文館中学に転校し、第一高等中学校へ。

1897年（明治30年）東京帝国大学法学部政治科に進み、ここで農業経済学も学んだ。

1900年（明治33年）卒業後は農商務省に入ったが、大学院にも籍を置いていた。当時の農商務省には法律分野に精通した人間がおらず、法制化が必要になると法制局の世話になっていたことから、法学部出身の柳田の採用に踏み切った。農商務省では農務局農政課に配属されて、全国の農山村を歩き回って実態を調査。1902年（明治35年）法制局参事官に任官。

1908年（明治41年）自宅で「郷土研究会」を立ち上げて、のちに新渡戸稲造との接点から「郷土会」に発展させた。また島崎藤村・田山花袋等との接触をしたり、幅広い人脈ができた。

1908年に兼任宮内書記官となった。この年九州を旅して、宮崎県の椎葉村を巡回し、翌年、椎葉村村長だった中瀬淳と共著で「後狩詞記（のちのかりことばのき）」を出版。

1909年（明治42年）東北地方を旅し、岩手県の遠野を初訪問。

1910年に兼任内閣書記官記録課長を任官。

1911年（明治44年）南方熊楠との交流を開始。

1914年（大正3年）貴族院書記官長を任官。この時の貴族院議長は、田安徳川家の五代当主徳川

慶頼の三男である徳川家達(いえさと)だった。

徳川家達は、1863年(文久3年)生まれで、1890年(明治23年)に27才で貴族院議員になり、1903年(明治36年)から1933年(昭和8年)まで、31年にわたって貴族院議長を務めた。

1918年(大正7年)、部下の人事を巡って人事権のある書記官長(柳田国男)の意向を確認せずに議長が行なった手続きがきっかけとなって衝突し、1919年(大正8年)柳田は書記官長を辞任。次のポストとして宮内省図書頭を提示されたが、このポストにいた森鷗外の立場を配慮して辞退し、退官。退官後は、朝日新聞社客員、慶応大学講師などをする傍ら民俗学者の道に専念し、さらに豊富な経験と知識をもとに、エスペラント語普及の活動や歌会始の召人など様々な分野で社会に貢献した。

1962年(昭和37年)88歳で他界。勲五等瑞宝章が決まっていたが、時の首相池田勇人が「これほどの人物が瑞宝章では軽すぎる」と異論を唱え、勲一等旭日大綬章の追贈が決まったというエピソードがある。

●柳田国男の農政論について (2011年 NHK ラジオ第一放送の原稿より)

ここでは、農商務省に入った柳田国男がどんな考えでどんな仕事をしたかが語られている。

柳田国男が農商務省に入ったのは1900年(明治33年)。この頃、日本の農業が抱えていた問題の一つが「地主と小作人の関係」で、当時小作人が地主に支払う小作料は物納(収穫した米)で、実際の米の収量の半分にもなっていた。

地主は、新しい技術の導入や農業の改良に熱心だったが、やがて都市に住む人が農地を買い取るなどが進み、農業に関心を持たない「ただの土地の持ち主」だけになっていった。

地主は、米の流通で利得を得ることにだけ着目して、農業そのものの改良への意欲や努力はなくなっていった。折から、国防のためにも食料の自給率を高めるべきとする考えも主流だった。

柳田国男が認識していた日本の農業が抱える二つ目の問題は、多数の農民が少ない面積の農地を耕している零細農業、つまり「効率の良くない農業生産」という点だった。

農業を独立した職業として確立できるようにすべきとして、過小農の充満する国から、可能な所へは大規模営農の導入も必要と考えた。また、農商務省の中には、アメリカや欧州各国の営農を学習してその導入を図るべきとする動きも出ていた。

柳田国男は、「農をもって安全にして快活なる一職業となすことは目下の急務にして、さらに帝国の基礎を強固にするの道なり」と主張していた。

1904年(明治37年)の日露戦争を経て、1906年(明治39年)には韓国の統治権を手に入れて初代統監に伊藤博文が就任したが、1909年(明治42年)にハルビン駅で安重根に暗殺されるという事件が起きた。

我が国の大陸への進攻が進み、抜き差しならぬ戦渦にはまり込む糸口の時期でもあった。

●農政改革と満蒙開拓団について (加藤聖文著「満蒙開拓団 国策の虜囚」より)

明治以降、近代資本主義の発達に伴い富が都市に集中し、農村では寄生地化した大地主への土地の集中が進み、農民の貧困は深刻化していた。1910年代に入ると、一部の農村では小作争議も起き始めていた。

一方では、協同組合方式を導入して農業経営の集約と大規模化や改良農法による生産力向上・米作一辺倒から商品作物や畜産へのシフトなどを通じて近代化を図る動きも出始めていた。

農商務省の役人であった柳田国男は、地主の自作農化による中農層の育成・小作料の金納化への

移行・台湾や朝鮮からの輸入米と内地米との間の価格問題などへの対応などを中心に革新的な農政論者として改革を目指していた。しかしながら柳田の革新的な考え方は受け入れられず挫折し、やがて彼は官界を去った。

1904年の日露戦争終結後、日本は韓国の統治権を得るとともに遼東半島の租借権と、ハルビン・旅順間の鉄道路線(満鉄)の權益を手に入れた。

満州鉄道の初代総裁だった後藤新平は、「満州国の安定した経営のためには日本人の増加が必要」とぶち上げた。後藤の自説によれば、「広範囲な職種で、10年間で50万~100万人が必要」だった。満鉄では、1913年(大正2年)頃から農事試験場を開設して、農業改良事業にも乗り出していた。

1914年(大正3年)から、鉄道沿線に除隊兵による移民34人を入植させた試みを始めたが具体的な成果は上がらず、1920年代に入ると関連会社を通じて日本人の入植も計画したが、これまた失敗に終わった。

朝鮮半島と満洲を手に入れたことで、エネルギー資源の問題も、農業が抱える問題も一気に解決するのだという楽観ムードが我が国を支配し始めていたようである。

1929年、第一次世界大戦が終り、世界は大恐慌に見舞われた。我が国では農業を中心に大打撃を受ける結果となった。しかし、そんなこととは無縁であるかのように、1931年には満州事変が勃発。

その結果、関東軍が満洲全土を掌握することになり、満州国という傀儡国家を作り上げることになった。ここでも再び、満洲の国体維持には日本人の数が必要との理屈が頭をもたげ、農業政策としての農民の開拓移住計画が、軍事力行使のための人民の移住という話に化け、さらに農地開拓のために満洲に送り込んだ人民を戦闘に活用するなど、陸軍(関東軍)により支離滅裂な筋書きにねじ曲げられていった。

農業の生産性を様々な形で数値化して、やがて「生産性の低い地域や農民は国外の開拓にあたる」という動きも始まりはしたものの、「農業の近代化」は、思わぬ方角へカーブすることになってしまった。そして、満洲への100万人移住計画が高らかに上げられて、戦局もさることながら農民の生活のありようまでが抜き差しならぬところへとはまり込んでいった。

*参考資料:拙著駄文「【満蒙開拓団】と【満蒙開拓青少年義勇軍】」

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/manmou.pdf>

●しめくり

加藤聖文著「満蒙開拓団 国策の虜囚」を読んでいた時に、ある頁で「柳田国男」の名を発見した。民俗学者として有名な柳田国男が農商務省(のちの農林省)の役人だったことを知ったのはこれが初めてなので、いささか驚きはあった。

柳田国男の退官の経緯については、いくつかの情報の中で不整合な部分もあるが、真相究明をしてみるつもりもないので、羅列に留めることにした。

明治維新後、我が国は近代化を果たしたものの、裏腹に犠牲を生むものも沢山あった。

そのひとつが「農業」という産業であり、改革が急がれていた。ところが我が国は欧州列強と肩を並べたいという願望から大陸に向かって戦争の輪を広げて行ってしまい、二つ目の犠牲を生んだ。

日清戦争・日露戦争と進んで行く内に、引き下がることができない局面にまで駒を進めてしまい、1945年(昭和20年)までそれが続いた。

柳田国男は退官後も各地を歩き、農村の実情を知り、そこに生きる人や文化をみつめ続けた。

「一つの時代を生きた人」という視点で眺め直すと、様々な側面が見えてきた。

以上